

第2回課題

東京大空襲・戦災資料センター訪問に際して、館長の早乙女勝元氏の著作『東京大空襲 昭和20年3月10日の記録』と、可能であればもう一冊早乙女氏の著作を読み、その感想をメンバーが綴った。

『東京大空襲』序章末尾、「私の人間としての執念のすべてをこめて」という一文の中に、早乙女勝元さんの揺るぎない思い、使命感が凝縮されているように感じた。ご自身も東京大空襲の被害者であるが故に「傷痕は、平然と人に語れるほど生やさしいものではない」と痛感しつつも、何とかして悲惨な体験を後世に残そうと尽力されている。

そんな渾身の力を込めたオーラルヒストリーである当書は、私の土地鑑があるエリアで、時系列構成の臨場感ある筆致で進むので、追体験しているような気持ちになった。勿論、この私の想像力には限界もある。

もう一冊は、去年刊行された児童書『赤ちゃんと母の火の夜』（新日本出版社）を読んだ。この話は、前出の本にも出てくる武者みよ子さんの話を再編集したもので、児童書らしく挿絵が添えられ、同じ話だが印象は変化した。とくに亡くなった十二人の子どもの愛らしいイメージイラストに心が痛んだ。視覚表現の強さを感じた。

この本は、中学生の孫に戦争に関心をもってもらいたいという私的動機から生まれ、挿絵はご子息が担当されている。現在の早乙女家三世代の関係が加味され、個人的には伝承における個と公についての新たな問いが生まれた。

(柳河加奈子)

私は『戦争を語りつぐ-女たちの証言-』を『東京大空襲』とあわせて読んだ。『東京大空襲』の27年後に書かれているという時代の違い、語る対象が戦争全体という範囲の違い、女性の証言を切り取った側面の違いを理由に選択をした。

読み進めるていく中で、早乙女さんが紹介する女性たちの語りや、まるで動物園の檻の向こうにあるような感じを受けてしまった。女性たちの語りに現実味がないこと、語りや（『東京大空襲』と比べて）詳細ではないこと、語りではなく語っている女性たちと彼女たちを取り巻く社会の紹介になっていることが理由だと思う。

対象が戦争全体と3月10日を中心とした東京大空襲という粒度の違いもあるだろう。そして何より早乙女さんが語って「あげている」ようにも受け取ってしまった自分に驚いた。

『東京大空襲』では、早乙女さん自身が見聞きされたことが媒介になり橋本代志子さんや斉藤うた子さんの語りに現実を描写する詳細が加えられ切実さがあつた。早乙女さん自身の使命感のようなものもシンプルで強く、言葉を選ばずに言えば、わかりやすかつた。しかし『戦争を語りつぐ-女たちの証言-』では何かもっと大きな使命を早乙女さんが背負ってしまっているために、女性たちの語りや早乙女さんの使命の材料になっているかのように感じる。

『戦争を〜』では語る人、早乙女さんがそこにいた。確かにそこにいたが、違和感があつた。性別が違うからか、年代が違うからか、当事者であるかどうかの違いがそうさせているのか。

『東京大空襲』は本そのものが早乙女さんだつた。早乙女さん自身が東京大空襲で、橋本さんで斉藤さんだつた。

聞くだけでなく、語りそのものになる技術が必要かもしれない。

(ヨネザワエリカ)

手にした本の風景は、車窓の先に見える風景と大きく異なっている。視線の先に空襲の有無を想像させるものはない。今、この車両で業火をイメージしているのは、私だけだろう。

記憶の断片を丁寧に紡いでいる。驚くのは情景の描写だ。まるで、一緒に行動しているかのように、詳細に描かれている。これは、事前に状況を綿密に調べ、取材対象者が想起できるように情報を提供していたのではないかと感じる。私は、記憶はフィクション（物語）であると思っていた。しかし、取材対象者が見たであろう風景、聞いたであろう音、感じたであろう香り、それらの記述が事実であることを強く意識させるのである。

さらに、裏付けとなるデータがその思いを高める。繰り返し提供される情報が、事実であることを印象付ける。読み始め、提供されるエピソードは、物語のように特別なものと感じる。しかし、繰り返される10万人という数が、次第にその分母の大きさをイメージさせ、もっと多くの「特別」があったのではないかと感じさせるのである。

私は、今では見えなくなった事実を、フィクションのように突きつけられ、ページを進めると徐々に「実際にあった出来事だった」と認識させられていた。

(佐藤卓也)

早乙女さんが住んでいた「向島区寺島町」は現在「墨田区東向島」となり、今私が住んでいる。

大阪で幼少期を過ごした私にとって戦争とは「広島」で、「東京大空襲」は遠かった。私の夫は墨田区生まれで小学校にあった東京大空襲の写真が恐ろしかったそうだ。今でも写真を見ると「見るのが辛い」と言うが、中学生の頃ワイドショーの「今日は何の日」で3月10日が「砂糖の日」と紹介されると、怒りがおさまらずに苦情の電話をかけたという。同年代の日本に生まれた私達の東京大空襲への距離は大きく違った。

私の東京大空襲は宇宙の果てから見ているようなものだった。本は私を宇宙からこの地に引きつけ、時代さえも超えて3月10日のあの時間に引っ張り込んだ。そのパワーは今この地にいるという実感と人の語りの言葉故か。実感がなければ、宇宙に飛んでしまう自分自身が恥ずかしい。

今は土を踏む度に東京大空襲で焼かれ、土に伏せ、埋まった人々が浮かぶ。土の中には何があるのか。

「その火を消すな 毎日毎日 たき木をくべよ」

図書館の地元作家のコーナーにあった早乙女さんの言葉。あの日、人と町を呑み込んだ炎を自分の心に住ませ、生きてきた人達をもっと知りたい。

(橋本佐枝子)

無責任かもしれないけれど、正直に言えば、とりあえずは平穏に暮らせている人生で特定の主義・主張を背負って社会と関わるのは損であるように感じてきた。積極的に関わるとして

も小さな世界・社会・問題で手一杯だ。不器用なので、大きなことを考えてしまうと足元が疎かになってしまう。

それでも語り部たちの一晩を追体験することができてよかったと思う。一市民として、もしくは一人の人間として、根っこから平和ぼけをしてはいけないのだと自戒させられた。自分がいつ何を背負わざるを得なくなるのかわからないのだ。目の前の誰かが何を背負っているのかわからないのだ。

『絵本 東京大空襲』は子ども向けの本なので虚構の体裁をとっているものと思って読んだが、子ども向けには十分すぎると感じられるほどのリアリティで描かれていた。どちらかといえば「要約版 東京大空襲」という印象を受けた。

強いていえば〈君が代〉に関する記述がある辺りが特に子ども向けなのだろうか。

(国分幹生)

「きいてしまったからには、このままではすまされぬ。」（『東京大空襲』より）という言葉が、早乙女さんが記録と向き合う根本的な姿勢だとわかる。早乙女さんは実際、相当な数の他者のまなざしに触れてきたのだとわかった。その証拠に、東京大空襲における様々な当事者について触れているからだ。当時日本に連れてこられていた朝鮮人や中国人、日本軍の捕虜になって空襲を体験した米国人など……彼らのまなざしが絶対に自分とは異なることを知りながら、早乙女さんはそれでも「あの3月10日に東京にいた者」として同じ立場で見つめているように感じる。きっと、何万人の語りを聞いても決して聞くことができないまなざし、つまり死者のまなざしと相対させているからだ。

その姿勢を見て、同じ人間の中でも、当事者と非当事者を行ったり来たりしながら何とか生きていくのではないかと思った。当事者という言葉には、どうしても「被害」の有無がつきまとうイメージだが、私はここでやめたいと思う。このイメージのままだと、前に進めないことが多すぎるからだ。憎しみが伴うから。新たに自分なりに「当事者」を定義するなら、「他者との関わりにおいて、ある事象に対して自覚的になれる人」と言いたい。体験や被害のない人でも、「聞いてしまったからには、このままではすまされぬ」と思った瞬間から、少なくとも当事者に手を伸ばそうとしているからだ。

(八木まどか)

できれば全く興味のない状態で早乙女さんのお話を聞き、そのあと興味の出た状態で本を読みたかった。宿題のように読むことが失礼な気がした。というか、自然な流れで自分の中に入れたかったと読後に思った。

奇跡的に生き残り、自身の体験の他に数人の記憶を自分の脳に入れ文字にし残す。生き残ったことも、その数人の方々に出会って話が聞けたことも全て自然な流れのように思えてくる。内容は、衝撃的なものだった。今まで見聞きした戦争の話より鮮明で残酷。自分がリアルに体験しているような感覚にさえなった。読み進める中で、僕は早乙女勝元という人間が気になりだした。生き残り、戦争の残酷さを後世に伝えしっかりとした真実を正確な史実として残したいという気持ちはわかる。しかし、冒頭に書かれている「八万人の犠牲者の浮かばれる道を、自分なりに考えたかったからである」という言葉が気になった。その犠牲者という言葉の中に早乙女さん自身の姿も見えたからだ。亡くなった方が辛いのは絶対にそうだ。でも、生き残り辛い記憶と亡くなった方々の気持ちを背負いながら生きるのも想像を絶する辛

さに違いない。早乙女さんは、ずっと自分が浮かばれる方法を一緒に探しているのではないかと感じた。

早乙女さんのことが気になった僕は『わが母の歴史』と『もしも君に会わなかったら』という著書を読んだ。わが母の歴史は、タイトルの通り早乙女さんの母親の話が書かれていた。明治、大正、昭和と生き抜いた女性の話。母の歴史を辿る中で昔の日本の生活がリアルに浮かび上がる。しかし、これもまた辛い時代を生き抜いた母親を浮かばせる為に書いてたようにも思えた。

そして『もしも君に、会えなかったら』は、早乙女さんの亡くなった奥さんについて書かれていた。少しずつ、奥さんのことが書かれていて、まるで自分の心を整理しているようにも思えた。ここでなにかが腑に落ちた。早乙女さんは生き残ってしまった自分の気持ちを整理し続けているのではないだろうか。そして、亡くなった様々な人の記憶や言葉を自分の中に取り込み前に進み続けているのだと感じた。僕の推測でしかないし、そんな単純な気持ちではなくもっともっと様々なものが入り組んで絡まっているのだと思う。でも、こうやって早乙女さんを現在を生きる、僕らと変わらない弱い人間として感じることによって、なにか本の描写などもより立体的になった気がした。往々にして読者は本の登場人物を超人的に見てしまう。そして、結局心のどこかでフィクションのような感覚で読んでしまうのだ。生身の早乙女さんに会うことが俄然楽しみになってきた。お会いしたら、また全然イメージと違うのだろうか。優しいイメージだが、めちゃくちゃ怖くて嫌な人だったら笑ってしまうかもしれない。

学校を退学した時に早乙女さんが母親に言われた「自分で自分らしく生きるんだよ」という言葉が印象に残った。たくさんの言葉を背負って生きている。

(長谷川優貴)

『東京大空襲(1971)』と、『下町っ子戦争物語(2010)』を読みました。この2冊、戦災の記憶を風化させない為に書かれた本、という点では共通していますが、戦後25年を経て、未だに国を挙げての検証・保証のままならない東京大空襲について、多くの人の証言を集めながら「きいてしまったからには、このままではすまされぬ」という思いの元、ある悲痛な訴えとして書かれた『東京大空襲』と、戦後65年が経ち、「あの戦争」という言葉を聞いても、それがいつの、どこの国との戦争なのかさえ、イメージする事が難しくなってしまった若い世代に向けて書かれた『下町っ子戦争物語』とでは、語りの質感に、当然の事ながら大きな差がありました。

あの夜、一体何があったのか。話を聞いた人達の「一方その頃」を順次照射し、逐一タイムラインを止めながら、当日の惨状を立体的に記述、米国側の資料の残酷なまでの綿密さと、国内に於ける検証の呆れるばかりのお粗末さを終盤で比較しながら、個々の証言を資料と照らして丁寧に編纂していく意味と意義を叩きつけるような一冊。

対照的に、膨大な資料や証言の裏打ちがありながらも、あくまで終始「物語」として、早乙女少年の素朴なまなざしを基礎に、開戦から終戦までの激動の日々が、やさしい筆致でユーモアいっぱい語られる一冊。

B29を初めて目撃した日の話や、空襲後の言問橋の茶褐色のしみ跡の鮮烈な印象についてなど、共通するエピソードも多く、この2冊を連続して読めた事は、ある出来事を語り継ぐとはどういう事なのかを、これから考えていく上でもヒントがたくさんあったように思います。

同時に、『下町っ子戦争物語』の中の、病弱な臆病者だったからこそ自分が持ち得た視点について書かれた一節に、早乙女氏の人柄や、一貫した人間性を垣間見たような気持ちにもなりました。

(足立靖明)